

二〇三三年九月八日

と行きてはまた戻りくる蜩蝶  
あるなしの風におしやべり秋桜

あひる

明日香

二〇三三年九月七日

芋の葉の裏を表へ風あそぶ

きよえ

虫の音に落ちゆく夢の世界かな

満天

二〇三三年九月六日

解体の瓦礫の山に残る虫

ぼんこ

八千草を籬としたる地鎮祭

せいじ

手を添へて水琴窟の秋を聞く

むべ

二〇三三年九月五日

秋晴や指笛高く犬を呼ぶ

澄子

言はでもの愚痴口に出て秋憂ふ

たか子

中庭に臥龍松見ゆ夏座敷

もとこ

秋暑し買ひ忘れして戻る道

せいじ

好きだった秋草手向く母墓前

きよえ

県境と記す標や吾亦紅

あひる

二〇三三年九月四日

ピカピカにキッチン磨き涼あらた

やよい

かなかなや友の墓石の真新し

むべ

日曆の瘦せしと思ふ九月かな

素秀

二〇三三年九月三日

猫じやらしホームの高さ越えんとす

明日香

乱れ萩風にほぐるる小径かな

素秀

二〇三三年九月二日

おはぐるのジプシーせるは獣道

豊実

箎に盛る獅子唐しの字つの字かな

あひる

野路ゆけば此処よ此処よと虫の声

澄子

群れなして旋回したる鯉涼し

ぼんこ

毎日句会みのる選・二〇三三年九月一〇日